

『ピカドン』(初版オリジナル復刻版)と『ピカドン』とその時代』刊行に寄せて

川口隆行 かわぐちたかゆき

新たな発見をもたらす古典

繰り返し開くたびに新たな発見をもたらす書物。手に取るほどにいまだ読まれることのない領野をその奥に感知させる書物。そうした書物を人は古典と言おうのだろう。

丸木位里・赤松俊子『ピカドン』の存在を知ったのは、ごたぶんにもれず大江健三郎『ヒロシマ・ノート』の読書経験であった。大江が紹介する「ピカは人が落とさなきゃ落ちてこ

ん」、「爆心地の話をつたえてくれる人は、いません」といった言葉は、原爆体験の被害と加害の複雑な問題など考えたこともなく、ましてや表象不可能性といった難しい言葉も知らない高校生にとつてさえ、「わかりやすい言葉」の奥に何か大切なことがあるのではないかと思わせるに十分なものであった。

これまでも幾度となく人々の記憶によみがえり、読み継がれてきた『ピカドン』。大江の遺言のような帯が附された琥珀書房による初版オリジ



初版オリジナル版の復刻版『ピカドン』と解説冊子の『『ピカドン』とその時代』の2冊組で1980円。丸木美術館または琥珀書房のオンラインショップ(送料無料で)にて購入可能。お問い合わせは琥珀書房のウェブサイトまたは電話(070-3844-0435)。早くも増刷が決定。丸木美術館では復刻にあわせて企画展『『ピカドン』とその時代』を開催中(2024年1月28日まで)。10月28日に刊行記念トーク、11月11日に幻灯『ピカドン—広島原爆物語—』上映などのイベントも開催(いずれも午後2時開始)。

ナル版の復刻は、二一世紀を生きる私たちに新たな再読の機会をもたらすだろう。判型、紙質、色合いなどできうる限り忠実に再現しようとした試みは、なによりまずこの書物が誕生した時代とそこに生きた人々の思いに読者の想像を促すであろう。

『ピカドン』が誕生した一九五〇年代前半は「朝鮮戦争レジーム」(テッサ・モーリス・スズキ)と呼ぶべき地域秩序が形作られた時代である。優れた絵と言葉といった内容はむろんのこと掌におさまるほどの小さく儂げなこの書物の物質性こそが、原爆投下からGHQ占領、東アジア冷戦と朝鮮戦争といった時代について、どれほどのことを「知って」いるのかと私たちに問いかけるはずだ。

解説冊子を手掛かりに

さらに今回の復刻が重要なのは、『ピカドン』という書物が古典となるプロセスに強く意識させることにある。その役割を担っているのが、セットとなっている五人の研究者の解説が収められた『ピカドン』とその時代』である。小沢節子『ピカドン』——たぐいまれなる物語、岡村幸宣『ピカドン』と「原爆の図」全国巡回」、鳥羽耕史『ピカドン』という出版物の流通と変遷

について、鷲谷花「幻灯『ピカドン—広島原爆物語—』について」、高橋由貴「『ピカドン』と大江健三郎『ヒロシマ・ノート』」。どれも二〇〇〇年代以降の原爆体験に関する文学や視覚表象に関する研究、戦後文化運動研究のエッセンスが集約された文章である。

これらの解説は『ピカドン』誕生のドラマを解きほぐすと同時に、なぜ、だれが、どのような立場から『ピカドン』を読み継いでいったのか、といったことを私たちに考えさせる役割を担っている。狭い研究業界に閉じられた関心を蘊蓄として提供しているのではない。現在を生きる読者が自分と『ピカドン』との対話のありようを、さらには『ピカドン』と対話するおのれ自身との対話のありようを、深く省みる有力な手助けとなるからこそ貴重なのだ。

解説冊子を手掛かりにして復刻版のページを一枚一枚ゆっくりと、時には行ったり来たりしながら繰ること、読者は時間をかけて絵や言葉の細部の意味を重層化、複雑化していくだろう。『ピカドン』という古典に張り巡らされた知識や経験の歴史に自分自身を位置づける試みが今こそ求められているのだからか。

(広島大学大学院教授)